

機関番号：14303
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19360281
 研究課題名(和文) 建築史研究における日本の方法によるフランス・ロマネスク建築の建築考古学研究
 研究課題名(英文) Archeology of construction on the French Romanesque Architecture, based on the Japanese methodology in the history of Architecture
 研究代表者
 西田 雅嗣(NISHIDA MASATSUGU)
 京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・准教授
 研究者番号：80198473

研究成果の概要(和文)：

- ① ブルゴーニュ地方とプロヴァンス地方の18の修道院、教会堂等について建築考古学調査を実施し、現状の正確な実測図面を作成した。
- ② 調査結果・実測図面より、各建築の建設に使われた物差しや寸法構成を明らかにし、部分の集合としての建物のあり方等、中世当時の心性に於ける建築様態の幾つかの側面の実態を考察した。
- ③ 建築考古学調査が日本的建築観に根ざす研究方法である事を受け、フランスへのこうした日本の研究方法を発信し、同時に日本的建築観に関する議論もフランス人研究者等と行い、日本的建築観とフランス中世に於ける建築観の類似、あるいは日仏間にある建築観の相違などに関する比較研究を行った。

研究成果の概要(英文)：

- 1. Investigations of architectural archeology were effectuated at the 18 Romanesque monasteries, churches etc. in Burgundy and Provence regions. Through this, the exact and precise drawings representing the present architectural state were also realized.
- 2. Based upon these results of investigation *in situ*, the metrological analysis aiming to clarify the measures used at the construction sites and the structure of measures was attempted. This brought us a real image of architecture held by the medieval persons, which is represented as a sort of architectural assemblage of the parts.
- 3. The research method used in this research program is typically Japanese one, rooted in the Japanese mental habit concerning the built culture. Therefore we also intended to export this Japanese method to the French researchers verifying its efficiency through our investigations on the Romanesque architecture, also through a comparative study on the Japanese and French notions of architecture with French researchers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2008年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2009年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
年度			
総計	13,200,000	3,960,000	17,160,000

研究分野：建築史

科研費の分科・細目：建築学 ・ 建築史・意匠

キーワード：ロマネスク建築、建築考古学、建築現場、尺度論、日本的建築観

1. 研究開始当初の背景

1990年代の半ばより、ヨーロッパの一部の美術史家たちがその意義を認識し実践し始めた方法論である「建築考古学 (Archéologie du bâti)」は、実は建築の技術的側面に大きな興味を示し、修復・修理の際には部材一本一本に至る迄建物そのものの精緻な調査を行う、日本の建築史研究が日本建築に対して伝統的に実践して来た建築史研究の方法である。日本建築史研究が「考古学的方法」で伝統的に実践されていることを知らずに、「建築考古学」の意義に気づき、その実践を始めたフランスの中世建築史研究の現状は、こうした日本の方法に馴染んだ日本人西洋建築史研究者が、フランス人研究者と交流しつつ、具体的なフランス・ロマネスク建築を例として「建築考古学研究」の実践に関与できる機運にあると言える。

これは同時に、建物と人間との付き合い方の一つの文化形式とも定義できるであろう「建築」という視点の獲得にもつながり、文化相対主義とグローバル化のジレンマの中にある現在、ルネサンス、あるいは19世紀以来のヨーロッパ型の「建築」とはおそらく異なる「建築」のありかたを明らかにするべき今日的使命を持っている中世建築研究を通して、日本とフランスの、あるいは現代と過去の建築観の相対化と言う意義を持つ。

こうした背景と目論みの下、日本的な「建築考古学」の方法論をロマネスク建築に適用し、従来のフランス人に依る研究が等閑に付して来た側面に光を当て、現代に意味のある新たなロマネスク像構築を準備する幾つかの側面を明らかにし、かつこの方法をフランスに発信することは意義のあることであると考えられた。

2. 研究の目的

建築史研究において伝統的に日本的な方法である「建築考古学」をフランスの比較的小規模のロマネスク建築に適用し、ロマネスク建築が中世の社会や人々の心性の中でどんな形で、如何なる意味を持って建設されたのかを明らかにする。

当時、建築を実際に構想した者たちや実際に建てた建造者たちが、実際に何を考え、何を意図し、何を実現したのか、建設の現場で、実際に何が考えられ、何が行われ、何が起こっていたのかを、そしてそれらが当時の社会の中でどのように考えられていたのかを、モノとして眼前に存在する建築物の石や柱や細かな寸法を詳細に観察し、記述し、記録し、分析し、考察し、建物そのものに語らせしめる。モノを対象に行われる「考古学」が、建築物を通して浮かび上がらせるロマネスク建築の社会精神史研究である。

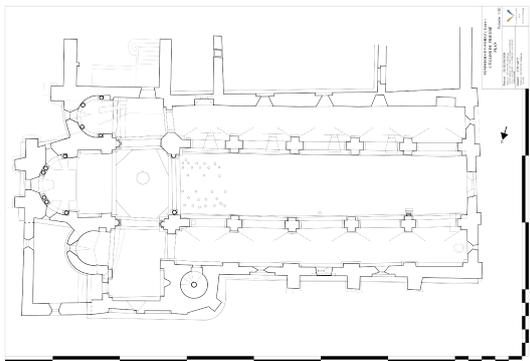
特に、西洋の研究者の間では未開拓の分野である寸法・尺度の建築考古学に重点を置き、日本の方法がロマネスク建築研究においても一定の有効性があることを示す。

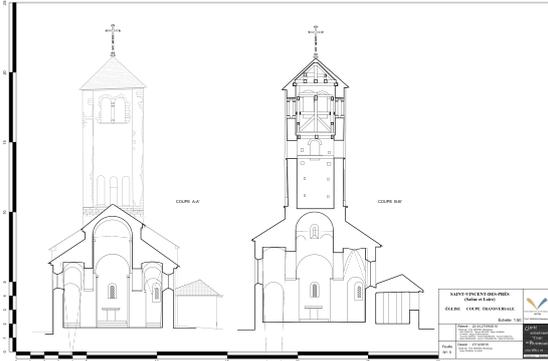
また、フランスの専攻的研究者との交流を密にし、調査で得られた情報の共有をはかり、ヨーロッパにおいても近年注目を浴びている建築考古学が伝統的な日本の方法であることとその有効性をフランスに発信し、「建築」というものを建物と人間との付き合い方の一つの文化形式と定義し、日本文化における「建築」、ヨーロッパ文化における「建築」を、建築観という視点から相対化する考察も、ロマネスク建築を通じた研究を軸に、フランスの研究者との交流を通じて行う。

3. 研究の方法

具体的研究として大きく以下の三つのことを実施し、目的達成を図った。

(1) フランス・ロマネスク建築についての実測を中心とした建築考古学調査：フランス・ブルゴーニュ地方とプロヴァンス地方に限定し、全部で18のロマネスク修道院、修道院の特定のまとまった建築部分、教会堂、教会堂の特定のまとまった建築部分の調査を実施した (Ameugny (補足調査)、Charbonnat、Charlieu (前身廊部)、Cray, Dettay, Massy、Mazille、Pommiers (教会堂)、Le Puley、Saint-Germain-Laval、Saint-Vincent-des-Prés、Vézelay (前身廊部)、La Celle (集会室)、Lorgues (洗面場)、Saint-Pons、Sénanque (集会室)、Silvacane (集会室)、Le Thoronet (集会室))。基本的に平面の実測調査を主とするであったが、二つの教会堂 (Massy、Saint-Vincent-des-Prés) については、平面、立面、断面に渡る実測調査を行った。また組積の状態、細部意匠、架構法、痕跡調査等も行った。





調査を行った建築については、Mazille（実測調査が不完全で図面の作成が不可能であることが判明）を除き、全て 1/50 あるいは 1/100 で実測図面を作成し、特に建設に使われた物差しと同定、寸法構成の分析に力点を置いて検討を行った。全ての調査対象建築について、主要な実測値寸法（メートル法）を記入した実測図、当時の物差しでの主要寸法を記入した実測図、寸法の記入のない実測図の三種類を作成した。

(2) 日本的建築観に係る研究：「実測」を中心とした建築考古学的方法が日本的な建築史研究であることの意味の確認、そしてそれがロマネスク建築の建築史研究に対しても有効であり、この方法をフランスの研究界に発信することを行った。

具体的には、本研究で得た、実測を中心として尺度論に基づいて行われた研究結果をフランス等での学会などで積極的に発表した。特に尺度分析、使用された物差しの同定は、フランスの研究者間でも余り行われていないテーマであり、日本的建築観に基づく日本の研究方法の有効性の検証となった。

同時に、より日本建築そのものを問う建築論・建築史的研究も、海外共同研究者である Philippe BONNIN が代表を務める、日本の建築文化に関する日仏研究者のネットワークである Japarchi を通じて実施し、家という概念とその建築的表現、境界の建築的現れ、建築やモニュメント、あるいは文化財という概念、そして（建築）考古学の日本の伝統の中でのあり方などに関する文献・フィールド両面に渡る若干の研究を、フランス人研究者と共同で行った。

(3) 建築考古学調査の整理・分析・保管、及び共有：研究室に保存されている 35mm スライドのデジタルデータ化は当初計画の 1/3 ほどしか実施できなかったが、デジタル化した分については、研究途上必要となる特に実測図作成時、あるいは、考古学的観察結果の他事例との比較に援用された。

過去の、また本研究での実測調査時の野帳、既に作成された実測図面、あるいは本研究で

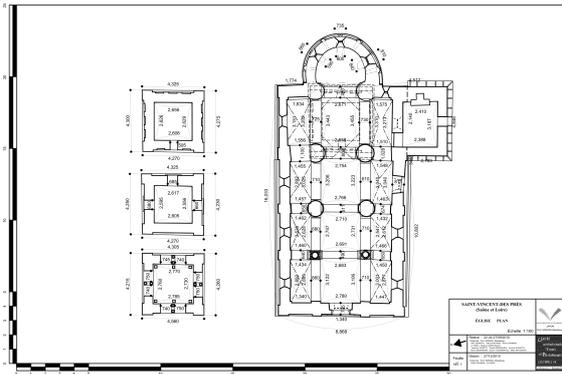
作成された図面は全てデジタル化してデータの状態で保存を行い、分析等に有効に活用した。大量の事例比較等を効果的に行った。また一部データは、建物所有者、修復担当建築家、文化財保護団体、関係地方機関、海外共同研究者の一部と共有している。

特に平成 21 年度より、共同研究者であるリヨン大学教授 Nicolas REVEYRON が学術理事を務めるフランス・ブルゴーニュのシャロレ・ブリオネ地方国際文化材研究センター（CEP）と協力関係を持ち、国の文化財担当局と協力して関係地域のロマネスク建築のデータベース・目録作りを実施している CEP には、本研究での結果を含めて研究室保存の関連実測データ、関連実測図を送付した。また平成 22 年には、CEP のロマネスク・データ・ベース作成事業に参画し、Massy と Saint-Vincent-des-Prés の両教会堂の調査を CEP の協力を得て実施し、作成した実測図、野帳、実測データ、写真は全て共有し、国の文化財担当局にも保管された。現在、国の文化財担当局に提出される、この二教会堂についての本研究での調査結果をまとめた報告書の作成中である。

4. 研究成果

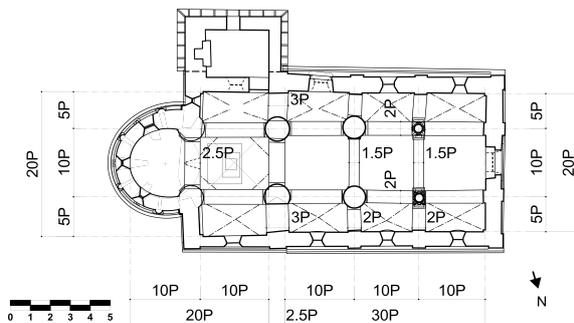
特に、欧米の研究者が余り重視してこなかった実測という日本的な建築考古学的方法が、漠然と言われていた従来の見解に説得力のある傍証を提供したり、従来の見解に疑義を呈したり、あるいは、従来全く問題とされてこなかった要素がロマネスク建築を考える際には重要であることが明らかとなった。

(1) ロマネスクの宗教建築についての従来の研究にあっては、寸法は宗教的な象徴性に専ら判断基準を置いて、霊聖の表現としてのみ専ら捉えられ、建設の現場と乖離した形で、高度に象徴的・神秘的に考えられることが多かったといえるが、本研究では、そうした霊性表現としての寸法の数象徴も持ちつつ、一方では、建設現場の実際に即した、工事の実態に見合った形での寸法の解釈も可能である事が実測調査で明らかとなり、従来の見解に検討の余地が大いにある事を示し得た。実際、実測に基づく我々の寸法分析では、多くの場合、建築に与えられた寸法は完数尺であり、必要に応じて二等分、三等分する場合があるときには、二の倍数、あるいは三の倍数の完数尺である事が多い事が示され、同程度の規模の場合、寸法として選ばれる数字にはある種の偏りがある事も予想された。こうした建設工事にとって合理的な寸法の数字は、同時に、従来言われて来たような霊的な数象徴、例えば聖書の中に現れる特定の意味などを持っている場合が多く、実用性と象徴性が重層していると目された。

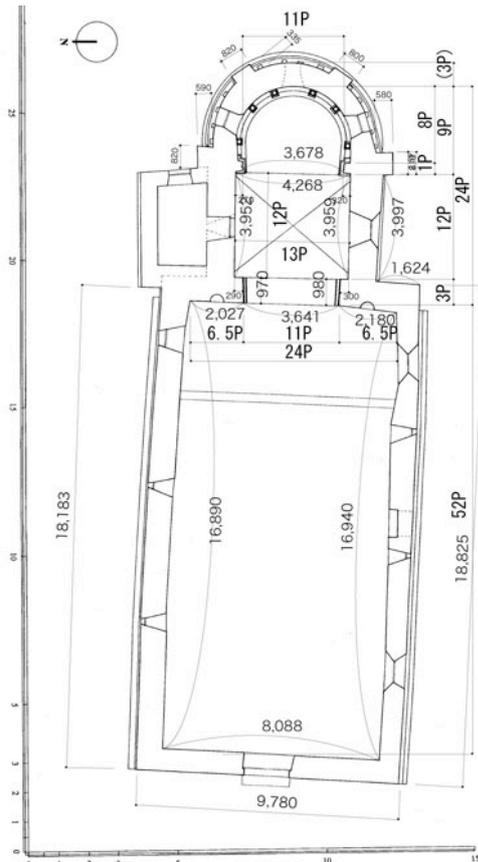


(2) また寸法の分析は、特にブルゴーニュ地方の小規模教会堂の場合、寸法の誤差の大小が、教会堂の特定の建築部分が、際立って入念施行されている事も明らかにしてくれた。ほとんどの場合、高い施工精度で作っているのは、東端部アプシスとその西側の、鐘塔を乗せる矩形の内陣ベイである。また鐘塔自体も、教会堂本体に比べ、入念で手の込んだ装飾が加えられている事がほとんどである。これは特に、木造天井の場合でもヴォールト天井が架かっている場合でも同様に、簡素で、施工精度が低く、かつ軸に対して大きな歪みを見せる事の多い身廊と対比的である。

こうした内陣-身廊の間のコントラストは寸法にも現れ、しばしば、内陣と身廊の間には、寸法に基準線のずれや、端数の付く媒介的寸法などが認められ、時には、内陣と身廊で使用している物差しが異なると目される場合もあった。内陣-身廊間には、従って明確に目には見えないが、ある種の大きな断絶があるのであり、建築の外観の形として、鐘塔を含んで内陣から身廊まで一貫したトータルな意匠が見られたとしても、実際には内陣と身廊は半ば別物のように建設され、そのように認識されていたと想像される。実際、古文書の中には、一つの教会堂で、内陣と身廊の所有者・管理者が異なる事を記している文書も存在する。



(3) 実測を通して見えてくる事は、ロマネスクの修道院や教会堂建築は、建設現場の実態に即した極めて技術的な表現を多く持つという事であり、こうした技術指向という性格は、日本の伝統的な建築観にも通じるものであり、本研究での日本の建築観を巡る研究に多いに示唆的な知見であった。技術指向と実測による接近が有効性を持つ、寸法が重要な要素となる建築のあり方は、物質的真実性よりも、形式的完全性とその形式内容を再現する事を可能にする技術の継承に重きを置いた日本の建築文化である。これは、例えば、伊勢神宮の式年遷宮に見られるような、建築文化財を通しての記憶の継承術であり、物質的真実性に記憶の継承を担保する近代の欧米の建築文化財のあり方とは異なる。しかし、以上のように、ロマネスク建築は、記憶の継承の戦略としては、伊勢神宮のような形式性が優位に建つあり方であり、欧米の建築にあっては、古代建築の再生をもくろんだルネサンスの建築観は、やはりこれと同じものである。現代の世界遺産などの文化財概念の根本の考え方は、ロマネスクにあっては成立しない。



ドゥテ教会堂 平面図 (作成 西田研究室)

以上のような研究成果は、当初目標としていた、フランスにおける公表も実現し、日本、フランスの両国に於いて、論文、口頭発表、招待講演、単行本のなかの一章、あるいは特

定項目として部分的に公表されている。また、本研究成果のうち、特にプロヴァンス地方の修道院に関しては、まとまった形の学術書の出版の準備に着手している。また、本研究成果である論文が掲載されるフランスの学術誌、研究書や、本研究成果の一部の単行本のフランスでの出版は、現在編集中、計画中のものがまだ複数ある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 29 件)

- ①西田雅嗣、原愛、岡北一孝、増永恵、岡北一孝、三宅拓也、サン＝ヴァンサン＝デ＝ブレのロマネスク教会堂について-南ブルゴーニュ地方の小規模ロマネスク教会堂に関する研究-、日本建築学会近畿支部研究報告集、査読無、計画系・第 51 号、2011、p.745-748
- ②西田雅嗣、榎並悠介、ドゥテとシャルボナの二つのロマネスク教会堂の平面について-フランス・ブルゴーニュ地方の小規模教会堂に関する研究-、日本建築学会大会学術講演梗概集(北陸)、査読無、F-2、2010、p.165-166
- ③西田雅嗣、フランス中世建築史-フランスにおける中世建築研究、建築史学、査読無、54 号、2010、p.105-129
- ④NISHIDA Masatsugu, La coordination métrologique et la spatialité dans le cas de quelques petites églises romanes en Bourgogne, XXIII International Congress of History of Science and Technology ICHST 2009 Budapest, 査読有、2009、p.722
- ⑤ Mizuki CRUZ SAITO, NISHIDA Masatsugu, Philippe BONNIN, Le Tatami et la spatialité japonaise, Ebisu, 査読有、no28, Automne-Hiver 2007, p.55-82 (出版は 2008 年)
- ⑥ NISHIDA Masatsugu, Jean-Sébastien CLUZEL, Philippe BONNIN, « Authenticité » et reconstruction de la mémoire dans l'architecture monumentale japonaise, Espaces et Sociétés, 査読有、131-no4, 2007, p.153-170 (出版は 2008 年)

[学会発表] (計 20 件)

- ①西田雅嗣、ロマネスクを測る-教会の建築考古学、建築史学会大会記念シンポジウム、2010 年 4 月 24 日、熊本大学
- ②NISHIDA Masatsugu, La notion d'« ié (maison) au Japon, Séminaire cooperative à l'EHESS organisé par Augustin Berque et Japarchi : Notion et Dispositif de la spatialité japonaise, 2010 年 2 月 12 日、社会科学高等研究院 (パリ)
- ③ NISHIDA Masatsugu, « Composition

architecturale » projetée sur le sol: étude métrologique du projet architectural dans le cas de quelques petites églises clunisiennes à nef unique en Bourgogne, Troisième colloque international de Paray-le-Monial, « Hugues de Semur, Paray-le-Monial et l'Europe clunisienne (XIe-XIIe siècle) », 2009 年 10 月 3 日、パレル＝モニアル文化センター (フランス)

④Nicolas REVEYRON (通訳、コメント：西田雅嗣)、西洋中世の宗教建築における光、日本建築学会歴史・意匠委員会西洋建築史小委員会公開小委員会、2008 年 7 月 10 日、建築会館 (東京)

⑤ NISHIDA Masatsugu, Le sanctuaire shintoïste d'Isé, forme immatérielle de l'architecture, Séminaire organisé par Madame Anita Guerreau à l'École nationale des chartes, 2008 年 2 月 14 日、国立古文書学校 (パリ)

[図書] (計 4 件)

- ① Vinni LUCHERINI ほか編、Mélange Barral, 2011、総頁数未定 (NISHIDA Masatsugu, Deux salles capitulaires jumelles en Provence : l'abbaye cistercienne du Thoronet et l'abbaye bénédictine de La Celle - Étude métrologique de la « copie » et le lien des ateliers en architecture du Moyen Age, 掲載確定、頁未定)
- ②長澤泰ほか編、建築大百科事典、朝倉書店、2008 年、総頁数 691 (西田雅嗣執筆項目：「教会堂-信者が集う神の家」(450-451)、「ロマネスク建築-「神の国」の形」(p.458-459)、「ゴシック建築-「まことの光」の空間」(p.460-461))
- ③日本建築学会編、建築論事典、彰国社、2008 年、総頁数 263 (西田雅嗣執筆項目：「パラディオ、アンドレア」(p.184-185)、「ヴィラール・ド・オスクール」(p.126-127))
- ④Philippe BONNIN ほか編、Centre des monuments nationaux/Monum, Éditions du patrimoine, L'espace anthropologique, Les Cahiers de la recherche architecturale et urbaine 20/21, Paris, 2007 年、総頁数 279 (NISHIDA Masatsugu, S comme Sacré, p.135-139)

[その他]

ホームページ等

新聞掲載：Le journal de Saône et Loire (フランス・ブルゴーニュ地方紙)、2010 年 9 月 27 日、Le professeur Nishida et ses étudiants en mission de relevés.....

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田 雅嗣 (NISHIDA MASATSUGU)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・

准教授

研究者番号：80198473

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者 (海外共同研究者)

Alain Guerreau

フランス国立科学研究センター・研究ディ

レクター

Nicolas Reveyron

リヨン大学第二・美術史考古学部・教授

Philippe Bonnin

フランス国立科学研究センター・研究ディ

レクター